年頭の御挨拶

会長　鈴木治雄

新年明けましてお目出度ございます。

会員諸兄には御機嫌麗しく初春をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

昨年の辰巳会の活動は全国大会をはじめ様々な会が開催され、いずれも盛況裡に終りましたことは、偏に会員諸兄の本会に向けられた情熱の賜であります。「たつみ」誌上で既報のごとく、会員の平均年令は八十才有余の会であり、全国一の長寿の会と思われます。この中にあって、最長老田子富彦翁が百寿をお迎えになられ、誠に本会の誇りとするところであり御同慶に堪えません。

さて、本年は依然として、経済情勢は不明瞭で回復の兆しがみられず、厳しい状況が予想されます。

この様な世相ではありますが、辰巳会は本年も様々な企画のもと、会員相互の親睦の輪を拡め、本会が今後も確固たる存在として発展をとげるよう、努力していきたいと思います。倍旧のご助力をお願い申し上げる次第です。

おわりに、会員諸兄の益々のご健勝とご活躍を祈念して、年頭のご挨拶といたします。

冨士松さんと直吉どんの事ども

鈴木岩蔵

とれば憂しとらねば人の数ならず
　捨つべきものは文筆なりけり

と言いたい程書く事は頗る苦手の僕である。而し書かぬわけには参らぬ。

冨士松さん直吉どんとは僕が物心ついた時以来呼び馴れた懐かしい名前である。本家とは煉瓦造りの砂糖倉庫を一棟隔て、東隣の洋糖商会に柳田氏は起居したに反し金子氏は本家の店で他の店員と同居して居たのと魚釣に長じて狩猟等にも私と共通の趣味があったので行動を共にした事が多かった。

▲鈴木岩蔵遺影

前者は大阪船場生れの実直堅実な商人型の番頭さんであるに反して後者は高知生れの荒削りの土佐ポー丸出しの書生然として居た正反対の存在であったが両者共に仕事には中々熱心であった。金子氏は閑があれば読書して居たが僕の記憶に残って居るのは当時の青年に盛んに愛読された「国民の友」である。後年大里精糖へ同誌の主筆人見市太郎氏を迎えたのも或は此辺の関係があったのではなかったかと想って居る。（勿論僕が米国遊学中の出来事であったので真の事情は少しも知らないのである）

柳田氏は砂糖直輸入の大先達で一生を世界砂糖貿易にささげた程のエキスパートで鈴木商店を世界的砂糖商に仕上げた人であった金子氏が次々と種々の新事業を発展させるに連れて氏のよき女房役として商業部門を擔当して金子氏に後顧の憂をなからしめたものである。青年時代の柳田氏が砂糖業界の新人で然も先覚者であった事は当時東京海上保険会社大阪支店長であった前の文部大臣故平生釟三郎氏が関西に於ける事業発展に最大効果を得た事件の主人公が柳田氏であった事をよく人に話された。

其の事件と言うのは、我洋糖商会が北国の或る得意先の荷物に荷主には内証で保険を付けて置いたのが物を言ったのである。現今では海上保険を付ける事は常識で商人の日常茶飯事であるが、其の頃田舎では保険の事など種種勧めても中々聴入れられなかったのである。保険の先覚者であり進歩主義者の柳田氏はＦＯＢで得意先に売った様にして実はＣＩＦで仕切ったのであった。荷主は案内の荷物船が沈んだとの報を受取るや一家浮沈の一大事とばかり青くなって飛んで来たのも無理はない。全財産を此の荷に掛けて居たのである。神戸に着くなり店へ来てみれば現実は予想に反し意外にも彼が投じた資金以上利益迄見込んだ金が待って居たのである。此の規模の保険教育が北国商人仲間で大評判となり、平生、柳田両氏共に其の営業振の一大広告をしたのであった。其の時其の荷主から贈られた記念品が僕の家に未だに残って居る。

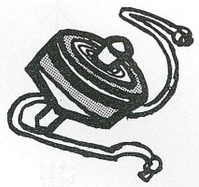
金子氏の無屯着は有名であるが、小僧時代に朝着物を裏がえしたまま平気で其の侭使に行ったのには母も困ったものだとコボして居た。此の様な無屯着から起った逸話は中々多く例を挙れば限がない。

嘗って杉山茂丸氏が金子は此の頃煙突病にかかっていると評された如く、新事業を次々と起し事業に没頭して事業以外の道楽は殆ど無かった如く想われるが水泳、釣漁、狩猟は仲々好きであり上手でもあったが、多忙と持病の痔疾の為め中止の形であった。同氏の暑中の冬装束は右持病による極度の貧血の現れであった。

記憶力の好い事は頭脳の明晰と共に金子氏の特色の一である。それが如何にして常に保たれて居たかと言うと、永年の間に養われた随時随所で五分でも十分でも熟睡することの出来た精神集中力である。あの南船北馬席の暖まる暇なき大活動が出来た原因も此の辺にあるのではないかと想われる。太閤の後に太閤なしの諺通り天才的人物の後に天才なしである。僕は野心を殺し成るべくジャマにならぬ様に心懸けたものである。

色々と両氏の思出でをたどれば記すべき、又は筆に出来ない秘話も沢山あるが、要するに両氏共鈴木家に対しては非常に忠実で晩年に至る迄我々が子供の時代からの親しみと主従関係は少しの変化もなかった事は両氏共に大義明分を心得た真の大人であったからだと僕は思っている。

（故人遺稿）



薄田泣菫の隨筆に出る
金子、柳田の若い頃

薄田泣菫の散文集「猫の微笑」（昭和二年刊行）の一章に「釜屋の老人」というのがある。その中には舊思想の釜屋の老人を中心にした金子柳田両翁の面白い話が載っている。鈴木商店に出入する商人には色々型の変った人物が澤山ある。茲には此の釜屋さんと云う剽輕で経濟家で頑固な骨董的人物を此の散文集から引いて、明治中葉の商人氣質を窺ふよすがとした。

今はむかし、明治二十七八年の日清戰爭前後の頃であった。その当時、名古屋に釜屋といって、伊勢灣方面は云うまでもなく、大阪神戸までも、名前の知れわたった商家があった。そこの主人水野安兵衛（釜屋の老人）は、その頃もう六十過ぎの老人だったが、商賣の取引ぶりにも平素の行狀にも、世間並の人達とは違った、隨分思いきったことを平氣でするので聞えた男で、普通ならば人に嫌がられて、とても許されそうにもないことが、

「相手が釜屋さんじゃ、どうにも……」

と、そのまゝ世間からも、取引先からも、見遁しにせられるようなことがよくあった。今も大阪神戸の大店の老番頭のなかには、釜屋の主人をよく知っているのがあって、偶にそんな話が出ると、

「名古屋の釜屋さんですか。あの方には隨分苛められたものです、一口に云えば、えげつない商い振でしたが、それでいて、腹が立たなかったのが不思議なようです、何しろ変物でしたからね……」

と、きまったように笑い笑い、その釜屋の主人の一風変った仕事振を語って聞かせてくれる。水野安兵衛といえば、それほどまでに風変りな商人であった。

(2)

安兵衛は、世間一般の商人がするように、どこへ持ち込んでも通りのよさそうな、普通の商品を取扱うことが大嫌いな性分だった。この人が手をつけるのは、疵物とか、端物とかいったような、普通の商人の持て余した、または滅多に取扱おうとしない品物に限られていた。濡れのある砂糖、汚点のある洋服地、端物の陶器、――大阪神戸邊の商店で、そういう物を抱えて困りぬいているものがあると、安兵衛は犬のようにすばしこくそれを嗅ぎつけて來た。そして話がまとまって取引がすむと、安兵衛はかねてから兵庫沖に廻してある自分の持船、安心丸といふ帆前船に積み込む。こうして船が積荷で一杯になるまでには彼は毎日のように大阪から神戸兵庫へかけて、めぼしい商店を一軒一軒こくめいに歩き廻って、

「困りもののお持ち合せはありませんか」

「疵物や端物の出はありませんか」

と、訊ねるのを止めようとしなかった。そんな折の安兵衛は、地味な木綿着の裾を端折って、脚には麻裏草履をはいていた。

釜屋の商賣振りは、普通の商人とはすっかり行方が違っていた。この爺さんは、どんな場合にも手帳と鉛筆とを忘れたことがなかった。困り物が見つかると、爺さんは膨らんだふところからそれを取り出して、相手の鼻先に突きつけたものだ。

「お手数をかけてすみませんが。あんたの手でちょっと品書きを作ってもらえませんか」

爺さんはどんなことがあっても、自分の手で品書きを認めようとはしなかった。賣り手の店のものの手で、持合せた品物の名前、個数、商標、價格などの明細書が出來上ると、爺さんはそれをふところに捻じ込んで、またほかの店へ廻って往く。そしてそこでも同じように品書きをしたゝめさせる。こうして一